

第一章
レックス編



第一話

亡弟レックスとの邂逅 (HOW I FOUND MY BROTHER)

時は一九一六年四月二十九日の夜、ワードの靈魂はトランス（恍惚）状態において肉体から遊離して無限の空間へと旅立ったのです。

あたりに渦まく暗い霧……しきりに起こる閃光……遠雷のように鳴りつづける大砲の響き……左往右往に電光が走るがごとき靈魂の群……混沌と暗黒との漲る世界……。

しばらくしてワード氏は弟のレックスの姿を見つけました。レックスは日頃の軍服をつけて、ただ一人路傍のとある土手に腰掛けていました。顔ははっきりしているが、どういふものか体が少し朦朧として……。

兄の姿を見るとレックスは跳び上がるばかりに喜びました。――

レックス「兄さん、僕は随分永いことお待ちしましたよ。今か今かとそればかり考えて……。」

ワード「ああそうだったか。一体お前はどのようにしてこんなところへ来たんだ？」

レックス「分かりませんね、さっぱり……。何やら悪夢に襲われているようで、前後のつながりがありません。よほど経ってから僕は初めて周囲の状況が変わっていることに気がつきました。しかし今でも物事にとんと順序が立ちませんね。まるで、オモチャ箱をひっくり返したようなあんばいで……。」

ワード「実は私たちは今日お前のために鎮魂祭を行ったのだが……。」

レックス「出席しましたよ、僕は、それに……。僕はばかにうれしかったです。妙なもので僕の体はぐんぐん一種の強い力に引かれて無限の空間を横切ると、向こうの方に一条の光が見える。やがてその光の前面に立つと、さらに光がだ

んだん加わり地面を突き透し、セントメアリーの寺院が見える、礼拝堂が見える、お父さんが僕の剣を聖壇の上に載せてるのが見える。とうとう祈祷式の光景全体が浮かび出て、お父さんの、兄さんの、その他の人たちだのの姿がすっかり現われたのです。しかし妙なことには地上に生きて活動している人たちの姿は何やら影みたくいなもの、周囲を包まれ、どうかすると容貌も少しずつは異なっている……。兄さん、あの影みたくいものは一体何でしょう？」

ワード「ありゃ、われわれの肉体だ。お前はエーテル界にいるからわれわれのエーテル体を見るのだが、エーテル体の姿は必ずしも肉体と同一ではない。エーテル界の住人には肉体ははつきり見えない。見えたところで影のようにぼんやりしている……。」

レックス「そんなもんですかね。それはそうと寺院には私が一面識もない人物が他に沢山いましたよ。その中の幾人かはあなた方に似ているが、ただ影で包まれていないところから察すれば多分エーテル界の住人なのでしょう。他の

「幾人かはそれともまたどこか異なっているのです。」

ワード「それはたしかに霊スピリットの世界の居住者にちがいない。」

レックス「そうですね。とにかくそれらの人々はどこからともなくふわふわやって来て鎮魂祭を見物していましたが、口には何も申しませんでした。私にとつては何ともいえぬ気持ちのよいもので、荒すみきつた狂った胸中に無上の慰安を恵んでくれました。ちょうど往むか時生きていた時に、心の憂うさを優しい音楽で慰められたようなあんばいに……。」

ワード「なるほどね。しかしエーテル界の生活ぶりはどんなものだ？ 変わったことがあるだろうか。」

レックス「いや、こんな寂ところしい境涯むかししたらありやしません。ご覧のとおり人間は沢山おりますが、僕の知っているものはただの一人もいない。まるで島流あしに遭あったようなものです。」

ワード「そいつあいけない。早速叔父おじさんに頼んでここへ来て手伝ってもら

うことにしよう。きっと来てくださるに違いない。むろん叔父さんは霊の世界スピリット・ワールドの住人で、ここにいるのではないが、しかしときどきエーテル界へ出張して来て、格別の世話はできぬまでも、お前の話し相手くらいにはなってくれるだろう。」

レックス「後生です兄さん、ぜひそう頼んでください。」

ワード「私は月曜日には必ず叔父さんと会うことにきめているが……。」

レックス「月曜ですって？ 何時頃になるでしょうね？」

ワード「今日は金曜日じゃないか？」

レックス「兄さん、そんなことを言っても僕にはチンプンカンプンです。地上とエーテル界とは時間がまるきり違います。いや、ここに時間があるのやらないのやら分かりはしないです……。」

ワード「弱ったね、どうも……。が、あんまり遠いことでもあるまい。急かずに待つ方がいい。それはそうと私がこの水曜日に自動書記をやった際お前がどうして懸かつて来たのかね？」

レックス「わかりません、僕にも。僕が死ねば通信するとかねて兄さんにお約束しておきましたが、僕はあの際痛切にその約束を思い出したのです。すると僕の体がぐんぐんある方向に引っ張られ、やがてボンヤリと寢室のようなものが現われ、そして兄さんがそこにいます。兄さんは僕に何やら話しかけていましたが、そのうち鉛筆が自然に動き出しましたので……。」

ワード「なるほどね——。しかし私はもう戻らねばならない。いずれまた出かけて来る。私の力に及ぶかぎりの世話^{せわ}はしてあげるから、その点は安心していてもらいたい……。」

レックス「あんまりあつけないじゃありませんか？ 何故^{なぜ}そう急いで戻らねばならないのです？」

ワード「何故でもない、ただそう感じるまで……。しかし来週はまたきつと来てあげる……。」

ワード氏がそう言っている間に^まレックスの姿は一陣^{いちじん}の風のように何所^{どこ}かへ吹

き飛ばされてしまいました。同時に周囲の混乱は一層激しくなり、硝煙しょうえんの渦巻く中を、ワード氏の体が下へ下へ下へ下へと際限さいげんもなく墜落ついろくしました。

しばらくは雷鳴やら雷光やらが周囲あたりをとりまいていましたが、やがてすべてが次第しだい次第に消え、ついに天地が元の沈黙に帰したと思つた瞬間、ワード氏は自分の寢室で目を覚ましました。時計を見るとそれがちやうど土曜の朝の午前二時半で、それから午前八時までには全然眠ることができなかつたそうです。

R.L.W

